

明治初期の兎投機―「開化物」とメディアから見えてくるもの

教育内容開発コース 白山映子

The Craze for Speculating in Rabbits:
From the Viewpoint of *kaika-mono* and the Media

Eiko SHIROYAMA

During the Meiji Restoration, Japan adopted Western culture, ideas, education and technology, and even introduced new animal breeds from the West, including new varieties of rabbits. Cross-breeding with domestic varieties produced rabbits with unusual coloring, and around 1873 these became the target of speculative trading. This phenomenon is known as the “Rabbit Mania”.

In the same period, the genre *Kaika-mono* (lowbrow fiction) was popular among the ordinary people. Stories in this genre include “Seiyō Douchū Hizakurige” (1870), “Aguranabe” (1871), “Bummei Kaika” (1873), “Kaika Mondou” (1874) and “Bummei Inaka Mondou” (1878).

This paper discusses two stories belonging to this genre that deal with the “Rabbit Mania”: “Tori Gekka Mondou” and “Usagi no Mondou”. The style of these stories is light and comical, and the former has a rather risqué flavor. The author explores the “Rabbit Mania” through an examination of the dialogue in these stories, and reports about the phenomenon in both English and Japanese newspapers. The paper also refers to related *nishikie* (colored woodblock print) parodies.

目次

- 1 はじめに
- 2 『兎狸月下問答』（とりげっかもんどう）
 - A 『兎狸月下問答』の序
 - B 『兎狸月下問答』内容
 - C 小結
- 3 『兎の問答』（小川為治著）
 - A 兎鷺正治の不平
 - B 平気先生の説
 - C 小結
- 4 社会現象となった兎の投機熱
 - A 錦絵に描かれた兎熱
 - B 国内の新聞紙上に現れた兎熱
 - C 外国新聞に見る兎関連記事
- 5 おわりに

1 はじめに

卯年は「ウサギが跳ねると景気が良い」という希望の俗説があるが、2011年の卯年は景気が良くなるどころか、株価は下降の一途を辿り、同じ卯年である1987年のNY株価大暴落のブラックマンデーを思い出す。2011年は世界同時不況の中で金相場が最高値を記録し

た。その相場にあやかろうと、手持ちの貴金属や装飾品を換金するために、銀座の田中貴金属に人々が列をなした。

かつて金ではなく兎が飛び跳ねて世相が混乱した年があった。1873（明治6）年のことである。酉年のこの年、鳥や豚、そしてとりわけ兎が投機の対象となったのである。

周知のように、この時期の「文明開化」を説明した通俗的な読み物のジャンルとして「開化物」が挙げられる。福沢諭吉の『西洋事情』（慶応2年刊）に代表される「文明」「開化」「文明開化」という表現は急速に広がり、明治7年に刊行された『明六雑誌』には「開化」が繰り返し登場する。このような流れに沿って「開化物」と称される一連の作品が刊行されていった。明治3年に『西洋道中膝栗毛』、明治4年に『安愚楽鍋』、5年『学問のすゝめ』、6年『文明開化』『開化の入り口』、7年『開化問答』『開化自慢』、8年『明治の光』、11年『文明田舎問答』、12年『開化のはなし』などが発行され、「文明開化」は衣食住の習慣から政治・経済・文化などに及ぶ社会現象となっていった。

本稿では、「問答」をキーワードに、上記のような「開化物」に属する文学作品である、『兎狸月下問答』と『兎の問答』をテキストとし、当時深刻な社会問題

となった「投機の対象としての兎飼育と売買」の考察を試みたい。兎投機に関する主な研究には、赤田光男が『ウサギの日本文化史』で当時の世相を追っており、「兎絵」を考察した富越薫子による論文「絵のなかに跳ねる兎たち—明治初期の「兎絵」を素材として—」がある。牧原憲夫は『明治七年の大論争—建白書からみた近代国家と民衆』で『兎の問答』に言及し、兎取引と兎税について自由放任か人民保護かを指摘している。しかしいずれの論考も『兎狸月下問答』に言及しておらず、また投機熱に対する外国からの視点がない。半ば教育的意図で書かれた『兎狸月下問答』（白山映子所蔵）と、投機・暴落の混乱を描いた『兎の問答』（国立国会図書館蔵）の内容を追いながら、内外メディアの言説を資料として用い、兎投機の問題を論ずることにしたい。

2 『兎狸月下問答』（とりげっかもんどう）（図1）

作者である瓜生政和（うりゅうまさやす）は、江戸後期から明治期にかけての滑稽本・人情本作者として知られる梅亭金鷺（ばいていきんが）の本名である。1821年5月2日（文政4年3月30日）に江戸両国に生まれ、1893（明治26）年6月30日に没した。柳剛流の剣客吉田勝之丞を父に持った政和は、父から修行を受け江戸若手剣客の雄とうたわれた。しかし瓜生家の養子になってからは戯作界に身を投じた。幕末維新の変革期において、剣の腕を活かす術もなく、激動する時勢をわき目に、戯作や茶番に惑溺し憂さを晴らしたと言われる。明治に入り小石川指ヶ谷町白山神社裏手の蓮華寺坂上（現在の白山2丁目）に世を避けて居住し、瓜生政和の本名で啓蒙書を書いた。維新前は滑稽本『茶番今様風流』（1849年）、人情本『柳横櫛』『春宵新話風見草』、幕末の茶番趣味の世相を戯画化した『七偏人』（1857～63年）などが代表作で、維新後は橋爪錦造の変名で滑稽小説シリーズ『寄笑新聞』を刊行し、『团团珍聞』の主筆として雑誌『驥尾団子』を創刊した。同誌に連載した滑稽小説『妄想未来記』は自由民権運動などの世相を戯画化した物である¹。

本名瓜生政和で西洋地理や窮理書の入門書、西洋事情紹介書などを書いたが、このような通俗的啓蒙書の一環として『兎狸月下問答』を位置づけることができる。

A 『兎狸月下問答』の序

『兎狸月下問答』は1873（明治6）年、瓜生先生戯

述という形で東京、明治学舎から出版された。画は寧斎柳坂による。国立国会図書館所蔵の近代デジタルライブラリーの書誌情報では刊行年が不明とあるが、この作品の内容からは明治6年に刊行されたことが確認できる。形態は21丁の和綴じで、書名からもわかるように兎と狸の問答である。

序

看書倦来眼朦朧燈火は春宵の月の如し 頭を垂肘
越曲礼出し倚て眠れば夢魂郊外に出でて月中に歩
す 草花露に咲誇り微風袖を払って香ばし 時に
傍の物有り 頭越廻らし看るに兎と狸なり 各人
語を做し談話喧々欧州の議事院の國務を論ずるが
如し 僕身を潜め耳を聳て聞出だし 兎狸の議論
倍盛んにして止ず 梵鐘曉を促し鶏鳴東天紅を報
ずるに驚き夢先覺たり 然ども其聞くところ耳に
残り現在の如し 毫を取り言いたる俣を記すに一
冊子の形状を為す因りて是を梓に上し月下問答と
題し童子が小学日課の余力蜻蛉つりに代んとす
其文その論元来兎と狸となり 看官鄙陋を咎め給
うも僕にはあらず知らぬ知らぬともうす

竹根稚子寸、伸る時

政和志留寿

夢の中で兎と狸の問答が聞こえた。目を覚ましてもその内容が耳朶に残っている。それを、子供たちが楽しむトンボ釣りのような意図で書き留めたもので、所詮夢の中の兎と狸の戯言だから品位に欠けても自分の責任ではない。このように予防線を張った序となっている。タケノコが伸びる時期に書いたといので、4月から5月初旬だと推測できよう。また稚子はタケノコの別名だが、幼い子供のことも示し、子供たちが少しずつ成長していく時期が投影されている。

B 『兎狸月下問答』内容

以下、原文とその内容を確認してみよう。（引用中、原文を損なわない程度に旧字や異体字を新字に改め、句読点を補った。また原文の目次は「通計11条」とあるが、実際は10条までで、便宜上通し番号をつけた。一部（ ）内に原文に付されていたルビを補った。）

1 狸兎を謀って身を売らんとす

空が晴れ、月が明るく輝き、花が美しく咲いている静かな野末に、月光に照らされた兎が青い芝生を褥に

月を見上げている（図2）。その寂寞なる景色に乗じて、狸はいたずらをして楽しもうとやって来た。一叢のススキの陰から狸が見たものは、耳が長く、1尺4、5寸の黒白黄の三毛で、斑模様の美しい大襟巻といわれる兎である。これを見て、狸は舌なめずりをする。これが世に言う上玉の兎で、この辺りでは見たことがないから外国から来たものに違いないと狸は思う。兎を騙して人間に売り渡せば高く売れ、鉄のぶんどく茶釜から黄金の茶釜に変われるだろうとのぼん引き心を起こし、狸は何食わぬ顔で兎に近づき問いかける。狼や虎がいる物騒な野原に安居している兎に「君は君主国〔日本のこと〕の地を未だ不案内と見受けたり、英吉利か仏蘭西か或いは亜米利加の合衆国よりや渡来なしたる〔兎でしょう〕」と狸は親切ごかしに出所を聞いて高く売ろうと考える。兎は「本草綱目²」を引いて、自分は外国産ではなく大日本武蔵野の産で白山神社の氏子だと返答する。外国産だと思い込んでいた狸は、「本草綱目」を引くのは「開化」に遠い愚鈍な兎で、甘口で騙して手中に入れようと考えてる。

君いまおん身が当世（とうよ）のあげられて全盛、一昨、年（さきおとし）の豚に倍す、これを以って世の人は是をあつかうこと臣の君をつこうまつが如く、孝子の親にかしずくが如し、あるいは妻妾を愛し子を愛するより厚きが故に食には豆腐屋の仕出しあり、居間には指物屋が新造営美なり、病氣（やまい）あれば医師を招いて是を療治し、出るときは網代の籠乗ものにめす、実（まこと）に王公の境涯なり、我が党はおきて獣類たるもの一として羨まざるなし

このように狸は、兎はこの時期評判が高く、2年前の豚の値段の倍に当たり、世人は兎を君主のように扱い、食べ物には豆腐屋からの仕出し、棲家は指物師が作り、病気の時は医者呼んで治療する、出かけるときは網代の手籠に入れられ、まさに王公のような待遇を受けている、これをみて、自分たち狸の党はともかくも、羨ましいと思わない獣類はいないと兎の心をおだてくすぐる。そしてそのような立場にある兎がのんびり月見をしているのは因循だと語る。

2 兎能無くして己の党の世に挙げらるるを歎ず

これに対して兎は、自分たちがもて囃され愛されるのは、才能ではなく色〔外見〕からのことで、祇王、

祇女、常盤御前等が平清盛から受けた寵愛のようなものだから長くは続かないと返答する。そして色を売るものは力がないからで、自分たちは所詮愚かだから、傾城、遊女のように媚を売り、狭い箱庭の中での窮屈な暮らしをするしかないのだと嘆く。

3 狸己を誇りて兎の痴をあざける

これを聞き、兎を騙すことはできないと知った狸は本性を現し、兎連中は能なしだと嘲り始める。長い耳や足は造物主の出来損ないであり、食糞の生き物は床の間の置物にもならない。万物の霊だと誇る人間が、このような無益な跳ねものに千円、万円のお金を費やすのは愚の骨頂だとやり込める。自分たち狸は夜になれば腹鼓を打ち、風がふけば大入道となって雨を降らし往来の人を驚かす（図3）。また狸寝入りは花街の遊客がやることだし、特に自分等の陰囊は自由自在であり、肩にかければ布袋和尚の袋のようになり、背中に背負えば熊谷敦盛の出陣の風呂敷に似ている。「孔子も我が党を讃して斯の如し実に獣中の知者というべし」と言っているのではないかと、長耳先生〔兎のこと〕向かって狸は誇る。

4 兎我性と狸の性を論ず

兎は、狸が指摘するように自分たち遅鈍で柔弱であるが、分相応に生きているから人間に愛されるのだと語る。しかしそれと同時に寵愛が過ぎれば後に必ず汚名を生じ、根拠のない罪を蒙ることになると嘆いている。そして兎は、飼育熱の始まりから流行までの状況を次のように説明する。

其故は世界今王政復古一大変革の秋（とき）に当たり、国中の武士をはじめ夫に出入りなしたる用達町人や或いは刀剣商人、刀剣職人または札差諸遊民など我が産業の薄きを以って士は商法を開かんとし、衰微の工商は其世営（いとなみ）を替んとすれども是また容易に有らざれば、何をがなと心を痛め工ふうを費し居る折から、豚の崩れの兎の養い初手はわずかに一、二分の金の儲けも手数かからず、然らば我らも内職のその内職に生育（そだて）て見んと、一人手を出し二人手を出し後から始める人に推れて兎は追々高くなり、儲けの殖えるにしたがいて商法を開かんとせしものも職業を替んことと思ひし人も些づつ兎へ肩を入れうけ、売買多く成に志たがい儲は益（ますます）盛んになる故、儲けしものは友を進め煮（にえ）き

りかねて居たものも恐（こわごわ）と手をだし遣って見るに、思ったよりも利益の多きにとりや、彼極しては居られぬところと…

王政復古の大変革時に当たり、周知のように武士や商人、職人たちは新しい仕事を始めようと躍起になっていたが容易ではない。折りしも高値をつけていた豚の値崩れに乗り、兎の飼育を始める者が現れた。幾許かの利益にもなり、飼うのにも手がかからないため内職のつもりで飼い出す人も現れ、手を染める者が続出した（図4）。それに連れて兎の値段も上がり、儲けが増えるにつれて兎売買にのめりこむ人が後を絶たない状況となってしまったとその状況を説明する。

… 稲川の女房もどき儲けし人の後追かけても雲霞なる浮いたはなしと、初手は誇りて居た人まで籠引き下げて出歩行かければ、また何がしか儲けの有るは、彼の生活（なりわい）を失いたる人の為には天よりして一時乃凌ぎ、何（どの）ようなる人が遣ってもつい出来る家業を下し、玉兎の髭を撫でたところなれど、隣の騒ぎの全盛に引き入れられて、活業（なりわい）ある人も徐々（そろそろ）かたわらから斯る儲けを余所にのみ見るの兎と手をいだし足に任せた駈走（かけはし）りより、終に自己が持まえの商売は脇へ投げ、島田枕に付しその間（ひま）も寒さにあらぬ襟巻や夜具の紗更紗（さらさ）の目につきて、眠りかねるは何事ぞ。

最初はそのような儲け仕事を非難していた者までが、兎籠を引き下げて出歩けるようになった。出かければ出かけただけの儲けがあるので、生業を失った人にとっては一時的な稼ぎとなるが、家業を疎かにしてまで襟巻き兎や更紗兎に目が向くのは一体どうしたものか。このように兎は憤る。

5 兎鷺の鮒を逃せしに託して人の慾を論ず

そこで兎は白鷺の失敗談を始めた。浅沼の汀で半日水底を覗き、やっと一匹の小鮒を見つけて啜えた白鷺は、水中の大きな鮒に目が移り、啜えて鮒を落としてしまった。そうしたら水中の鮒も見えなくなってしまったのだが、啜えていた鮒が水面に映っていたのだった（図5）。兎は、欲張ったばかりにせっかく捕らえた鮒まで失った鷺の例から、家業を捨て浮いた儲

け話に身を投ずることを諫めている³。農工商の職業は自分の為だけではなく国にとっても欠かすことはできない。兎を売るのも商売ではあるが、これは遊商であって実務の商ではない。兎は、本業を持つ人たちは、自分たち兎を愛玩として飼うべきだと語る。兎の飼育は一時的な流行で、廃れてしまえば何の役にも立たない。本来の仕事を失い、身を持ち崩し、最終的には遊民に等しい境涯となって貧窮に至る。そして家産を失ったのは自分たち兎のせいだと責められることに閉口している。

6 兎大いに狸の性をなじる

愛されないこと不満を持つ狸に対して、芝居小屋の口上に合わせて変幻自在となれば、人間は狸を愛するだろうと話す兎。狸が人前で太鼓の曲打ち、入道の早変わりなどをすれば、オーストリアに今年ある博覧会⁴に出ても勝る珍物だろうし、人はお金を山と積んで狸を招待するだろうと兎は語る。狸は密かに目論んで人を脅かすから憎まれるが、自分たち兎は公然と愚を表し繕わないから愛されるのだと、かちかち山の話が引き合いに出される（図6）。狸は、密かに芸をする時は人を誑かし狸自身の楽しみになるが、公然とする時は人の慰みとなると答える。人に使われ人を楽しませて自分の自由が奪われるよりは、自由気ままな生活を選びたいと狸は答えるのである。

7 狸本朝と西洋の往昔を引きて兎を論破す

兎には兎、狸には狸の性質があると言う狸。本朝〔日本〕ではイザナギ、イザナミの尊が国土、山川草木、群神、蒼生（あおひとくさ）〔人民のこと〕を生み、その時に狸も作った。西洋では天帝が6日間でこれら作り、兎には長い耳と足、狸には大きな陰囊と膨れた腹をつけた。こうしたことはどうしようもない。公然と行うのも密かに事を成すのも天から授かった性である。天帝が骨折った賜物を変える道理があるものか、十五夜の月の宮殿で餅でもついていると狸は兎をあざ笑って言う。

8 兎象の陰囊を狸につけ猪の耳を兎に附ける往（ゆき）ちがいを示す

これに負けずに兎は、日本の万物はイザマギ、イザナミの尊からの賜物だが、西洋の万物は天帝が6日間で作った急ごしらえのものだから、象につけるべき陰囊を狸につけ、イノシシにつけるべき耳を兎につけるなどの間違いをしたと言いつつ。アダムとイヴの二人

の人間から人が増えたが、邪悪な人間が増えたので、ノアの一族だけを残した。形体（かたち）の出来損ないはそのままにして、心の出来損ないを潰したのだと説明した。

9 兎また日本と欧羅巴の古今を論じて狸を説く

続けて兎は、形体も心も天から授かったものだが、それを作っていくのはその国の風俗や人々の了見によると語る。眉毛を落としお歯黒をするのは日本の風俗だが、耳輪や腕輪は西洋の装飾品で、流行はその国の風俗である（図7）。外見は見たまでのことだが、手を入れて作る心は植木屋の松のようなものである。天から受けたままで何もしなければ学問の肥やしにもならない。人間といえども困苦して勉強しなければ、自分たち兎と同じ種族に成り下がってしまうだろう。自分たちは生来愚鈍なので、愚を守るのが勤めだが、狸には腹太鼓の音曲があり、七変化の所作事もあり、狸寝入りはよく知られていることだ。形体も心も天から授かったものだが、だからと言って授かった能力をそのままにして置く道理はないではないか。このように言われて狸は返答に窮した。

10 狸開口兎月下に呟う

狸は奥の手を使い、ころりと狸寝入りに空軒の様子。これを見てまたいつのも狸寝入りが始まったと見て取る兎は、髭を撫でながら月に向かってとぼけて歌う。「ううさぎ、うさぎ 何見て跳ねる 十五夜お月さま見て跳ねる ぴょいぴょいぴょい」。

C 小結

このように『兎狸月下問答』は、投機の対象となった兎と、滑稽なおどけ者の狸の会話形式で、生業を大切にギャングルで身を持ち崩さないようにとの教訓が込められた作品である。

瓜生が序文で述べている品位欠如の言い訳だが、戯作者が無責任を取って公言しているところが面白い。またこの問答が、狸と兎の得意技である狸寝入りと「ぴょいぴょいぴょい」の飛び跳ねで終わっているところは、とぼけた茶番劇の本領と言える締めくくりである。

兎は「大日本武蔵野の産で白山神社の氏子」と自己紹介しているが、瓜生は当時白山神社の蓮華寺坂下に住んでいたので、兎の口を借りて発言していることが分かる。狸をなじってはいるものの、瓜生はそれほど狸を否定しているわけではない。むしろ狸の習性に愛

着を覚えており、自由人〔自由獣〕への憧憬が感じられないだろうか。自由気ままな狸と囲われの兎の対比は面白く、兎には兎の分があり、狸には狸の性があると述べ、それぞれ自身に合った生き方を示唆している。そこには当時の瓜生の置かれた立場が投影されているのではないと思われる。

瓜生自身維新前の遊戯生活から維新後の社会変革に旨く対応できなかった。明治5年、国民教化を目指した「三条の教則」発令後、自由人であった戯作者たちは生活や表現も自粛しなければならなかった。つまり、戯作者梅亭金鷲は本名瓜生政和に転身し、表向き飄逸のポーズをとりながら、新時代への風刺を交えた作品を著したのであろう。瓜生の複雑な心境が『兎狸月下問答』の序文に込められていると筆者は考える。

当時の兎の飼育熱に浮かれた状況をよく伝えており、高い値がつく兎は、三毛の毛色や長耳、更紗といわれる斑模様だった。それもイギリス、フランスやアメリカの舶来物で、それらを掛け合わせるとまた珍しい兎が生まれる。食べ物はオカラを常食とし、豆腐屋では豆腐よりオカラのほうが良く売れ、豆腐屋からはオカラの仕出し、出かける時は籠に入れられ、病気になるば獣医に診てもらおうという破格の待遇を皮肉っている。

3 『兎の問答』（小川為治著）

冒頭で紹介した開化物の『文明田舎問答』では、「文明先生」というあだ名の先生が、旧幣頑固の代表者である角兵衛、田平親爺、滅方弥八、天の空彦を相手に、学校、太陽暦、徴兵、万国交際、鉄道に触れ、文明開化の有難みを戯文体で説明している。また『開化のはなし』には、開化文明（ふみあき）という西洋好きと、石部君、書生が「三人寄れば、文明の開化論」という形式で旧幣を批判している。

作者小川為治（おがわためじ）⁵は「開化物」の中でも最も有名な『開化問答』の作者であり、通俗的な啓蒙書を得意としていた。『開化問答』は、因循姑息な旧習慣を体現した旧平と進歩的な開次郎の二人による問答形式の「開化物」で、子女への啓蒙書を意図していた。河鍋曉斎画による本書は好評を博し初版は万余部を発売したとある⁶。

『兎の問答』は明治6年12月に出版された。僅か10丁の短い作品で出版部数は未詳である。その表紙には羽織を着、キセルを手にして擬人化された2羽の兎が向かい合って座っている。題名に「問答」と付けてはいるもの

の、最初に「兎鷲正治（うさぎしょうじ）」が兎税や集会、競り売り禁止の通達に対して不平を述べ、その後それに答える形で「平気先生（へいきせんせい）」が延々と自説を展開して行くので、実際には複数の掛け合いはない。『兎狸月下問答』を意識していたのかどうかは不明だが、文字通り兎の問答である。

A 兎鷲正治の不平

明治6年12月7日付⁷、東京府知事大久保一翁が各区長宛に府達を發した。それは「当春以来兎売買之儀ニ付テハ度々告諭イタシ置候処未相止左之上税申付ル間区區無洩所持人名取調月月二十五日限り集金可相納此旨相達候事」と記された兎税徴収の通達であった。

- 一 兎売買候者ハ双方ヨリ其区扱所へ増減可届出事
- 一 区區扱所ニ於テハ姓名無遺漏記載イタシオキ月月税金可取立事
- 一 兎一羽ニ付月月金一円ツツ可相納事
- 一 無届ニテ所持候者有之節ハ一羽ニ付金二円過怠可申付事
- 一 多人数集会競売候儀ハ是迄之通一切不相成候事

この布告を懐に入れて、近くに住む兎鷲正治がやって来た。兎を売買した者は、売手買手両者とも取扱所（戸長役場）に届けること、取扱所では所有者の氏名を記載すること、兎所有者に対して、1羽につき月に1円⁸を税金として納めること、無届で兎を所有した者には1羽につき2円の罰金を納めること、多人数で兎集会を催し競売することを禁止すること、といったお触れが回って来たのだという。

兎鷲は、この春から兎を飼っていた者は、相場が100両から4、5両に暴落してしまい、景気復活を願い、日夜寝食を忘れて神や仏に祈っている状況なのに、こうした通達は無慈悲だと話し出した。そして「百両の損なら五十両で追付ようになすって下さるが政府之御仁恵かと思ひます。それを死ぬ者乃喉を乾すようなる御政事は、あまりといへば酷き事ではござりませんか」と不平を言うのだ。これに対して平気先生はからからと笑って答えた。

B 平気先生の説

平気先生は兎鷲正治に向って長談義を始めた。兎鷲の不平は理屈に合わない指摘する。なぜならば政府（おかみ）は運上（税金）を取り立てるのが本来の仕事であるからだ。兎は食用にもならず猫のように鼠を

捕ることも出来ない、盗賊の番も出来ない無能無芸の無用な物、子供の玩物（おもちゃ）という他はない。「兎売買はとんと博奕に類したもので、そのわけは高が一朱か五百文の値打ちの物を百円二百円に売買するはいわゆる運否天賦の仕事」で、元手がなくなるのを覚悟してのこと、親と争論し、女房を追出し、政府を怨み、身を投げ、首をくくるのは馬鹿この上ないと発する。

博奕の類の商売なのに政府が差し止めない理由は、品物を売り手と買い手が景気によって値段を決めて行うため、実態は賭博でも品物の売買という「商業之姿」であり、「政府には人民の商売を禁止（さしとめ）る権利というものがなきゆえでござる」と、政府の商売への介入を否定する。

また「いくら沢山子を生（うん）で殖（ふえ）たとて外国へ売れる物でもなし、また日本人の為に何の用もなさず実に無益な物」、本業の家業を捨ててまでこのような玩物に奔走するのは時間の浪費であるから、結果的に「日本総体の貧乏に陥る」と語る。

さらに私有税と物品税の二種類の税を挙げて課税の根拠を示している。土地や家作に課するのは私有税で、絹、茶、蚕紙などすべての産物にかけのが物品税である。生活必需品には物品税を課さない仕組みだが、金銀細工やお菓子や酒タバコ、寄席などの贅沢品と見なされたものには重い税金を課するのは当然で、兎は玩物の類だから「重き運上」の対象となるのは当たり前だと説明する。

イギリスでは酒に対して3分の1の税をかけて飲みすぎを防ぐ、それでも飲みたい人は高い税を払えば国困を助けることになる。すなわち「一挙兩得の名法」だと看做し、

今日本の兎も丁度これと適当したことにて、かかる玩物のためにあたら光陰を費やすは当人のためには困窮の種蒔き、日本のためには貧乏の基因〔原因〕にて政府にては貧乏神が家の内に踊っているようなる心持なり。されどもこれを売買するは人民自由の権にて妨るわけにはゆかず、さりとて捨置きては終に人民一同困窮に陥るところより抛（よんどころ）なく重き運上をお取なさるわけにて…

このように兎税を肯定し、玩物好（おもちゃごのみ）から税金を取り立てるのは国益になると主張している。兎を売買するのも、野山に捨てるのも、持ち主

の勝手に政府には関係ない。ただ政府は「人民の為を謀り後害を予防し職分を尽すまで」で、人民の為になることを諂るのが第一の職分である。それゆえ兎売買でも「損があるとして立腹も出来ず、運上を取立てられるとても政府を怨むわけにもゆきませんまい」、自業自得、身から出た錆だと平氣先生は言い放った。これを聞いた兎鷹正治は言葉に詰まり頭をかいて去って行った。

C 小結

この話の教訓の一つは自己責任論である。「お金に余裕」があり「玩物好み」の人たちの投機的売買には損得が付き物だから、損をしたと泣きついて「自業自得」だというわけである。贅沢品には高い税金というのは理解できるが、兎飼育を贅沢品とみなすのはこじつけである。また寄席が贅沢品に当たるのかは疑問である。庶民の娯楽は贅沢品だったのだろうか。

この通告には統制理由が付記されていた。その内容は、家業が衰退する懸念であり、高い税金を課せば自然に兎飼育が減って行き、徴収した税金は養育院の費用に当てることにしたというものである。「一石二鳥」を狙った政策だったが、養育院の費用として利用されたかは不明である。そしてこの種の課税がはたして、ギャンブルで身を持ち崩さないようにという人民保護の為に行われたのかと言うと、それは疑わしい。なぜならば、兎税の情報をいち早く入手した旧古河藩主は華族中でも兎儲けが巧みで、布告が出る前に売りぬき被害が少なかったとされる。これに引き換え下級の士族や一般庶民は、なけなしの金をはたいて兎の値上がりを期待したが、結局破産の憂き目に合ったからである⁹。

4 社会現象となった兎の投機熱

上述のように『兎狸月下問答』や『兎の問答』が出版された背景には、投機対象として兎が飼育され、値段が高騰し、兎の売買がギャンブルと化した社会状況があった。西洋からの文化移入は日本の伝統文化に影響を与えたが、それは動物の飼育にも現れた、錦絵の中にも兎飼育が開化の表象として描かれている。また新聞紙上には兎投機関連の記事が展開していった。さらに外国の新聞にもその熱狂を批判的に扱ったものが見られる。以下にその実態を検証したい。

A 錦絵に描かれた兎熱

因循が開化か、日本本来のものか、舶来のものかの対比が錦絵にも描かれており、明治6年にはこのような新旧合戦が錦絵に度々登場した。兎の流行は1871(明治4)年から始まり、明治6年にはピークとなり、兎は舶来物として錦絵に描かれている。

「開化因循興発鏡」では、腰蓑をつけ赤いシャツを着た兎が、緑色の着物を着た豚を櫓でやっつけようとしている(図8)。「本朝舶来戯道具くらべ」では、ブームで羽振りが良かった兎に対座して、人気のない鼠が鶏を保証人に金銭の援助を求めている姿が描かれており、何とも滑稽である(図9)。また兎ではないが、番傘を持ち雨合羽を着ている河童が、トンビ[マントのこと]を着て洋傘を差している鳶(とんび)に威圧されており、その語呂合わせも面白い。「因循開化流行撃剣会」では、兎とオケッコ[烏骨鶏のこと]や軍鶏と牛が竹刀を手に試合をする場面が描かれている(図10)。「流行兎出会図画」には人気の兎が勢ぞろいし、「大津ゑ替うた」(筆者不詳)や「大津ゑぶし」(曜斎画)は大津絵節の替え歌を載せ、流行兎と遊女の身の上がなぞられている。

当時の娯楽の代表であった歌舞伎では「兎絵源氏店」(豊国画)や「関の兎」(「積恋雪閑戸」のパロディー)の錦絵がある。前者は「切られ与三」源氏店(げんじだな)の場に見立てて、「さらさのお富」「白うさの与三」「くろぢの安(やす)」の掛け合いは兎に因んだせりふまわしで好評を博したとされる。

B 国内の新聞紙上に現れた兎熱

それでは新聞にはどのような記事が掲載されたのだろうか。

『諸聞集』(東京大学史料編纂所蔵)の「明治六年三、四月頃風聞書」には、明治4年頃から兎の流行が始まり、5年に本格化し値段が高騰したとある。特に地の毛色に斑模様がついた物は人気があり、オスは15両、メスは5、60両、「孕兎」は7、80両という高値がついたということである。

明治5年には600円の値がついた兎の記事が載り¹⁰、翌月「豚価暴騰—兎も暴騰—」と題して、「昨末ノ年中豚一頭ノ価五、六百円ニ至リシガ、今年ハマタ兎ノ価一疋五十円ニ騰レリ、豚ノ高価ニ到リシハ国産ヲ充セシメメ良種ヲ選ラビ、海外万里ノ異域ヨリ取ヨセタレバ左モアルベシ。然レドモ兎ノ高価ニナリシハ其所以ヲ解セズ、蓋シ一時姦商共相計リテ、好事家ヲ欺シ、非常ノ利ヲ貪ラントノ所業ナランカ¹¹」とある。

豚とは異なり兎の高騰は姦商が好事家を騙して利益を食うものだと非難している。

明治6年4月になると売買はさらに盛んになり、悪徳業者が増えて行った。毛色の違った兎で一儲けしようと白い兎を柿色に染めるものも現れ、取締りが厳しくなっていく。しかし旧華族士族から市井のものまでが兎飼育と売買に熱中し、処罰が行われても取り締まりが困難になった。見かねた東京会議所は、東京府に売買禁止の建白書を提出している¹²。

兎流行による殺人も起こった。同年4月の『新聞雑誌』には、自分が飼っていた兎を1羽150円で買おうという男いたので売却しようと考えたが、その父親が200円でなければ売らないと言い張り断った。しかしその夜兎が突然死んだため親子喧嘩となってしまう、突き飛ばされた父親が庭の飛び石に眉間を打って死亡した。また兎売買で巨大な利益を得た主人が、奉公人に利益を分与しなかったため、主人の妻の歯を折るという悲喜劇もあった¹³。

『日要新聞』には、英国人某が1万5千羽の兎を輸入し、「耳の長さ一尺二寸浅黄さらさ毛にして目方二貫七百匁」の兎を、娘を売ってまで買おうとする者がいたと記されている¹⁴。

前述のような大津絵節を取り入れた風刺記事も現れた。

兎ノ売買終ニ止マス、愈盛ニシテ愈貴シ、此頃絃妓等ノ歌エル大津絵節ニ、大籠ヲ立ヌイテ兎ノ姿ガ目にタタバ提藍ニ身ヲウツシ、馴レヌハタ師ノ手ニカゝリ、二日三日ト身ヲ任セ、廿日妊ミガ四十両、ツガイ離シテ雄ガ二分、柿ヨリダイジノ黒更紗、サゾヤオカラモ高カロガ、タント食シテ子ヲフヤシャンセ¹⁵

これは三味線に載せて花街で歌われた。兎売買はますます盛んになって、大きな籠で飼っていた兎の姿が良くなって来たら、提げ籠に移され、買い慣れない旗師¹⁶の手にかかり、2、3日のうちに妊娠し、20日のハラミウサギが40両、雄が2分で取引され、柿色よりも黒更紗が好まれ、オカラ〔兎の餌〕の値段も高いだろうが、沢山食べて子を増やせ、という内容である。兎は妊娠約ひと月で出産するが、10日前のハラミは珍種奇種の子ウサギを産まれるかも知れないという魅力から高額で取引された。いわば先物取引である。それは雄ウサギの2分と対照的に扱われている。また柿色の毛色よりも高値になったのが黒更紗だった。さらに餌

のオカラが豆腐よりも高くなっていたことを風刺している。

このあとしばらく記事は途切れるが、12月7日の兎税通達でにわかに紙上が賑わって来た。『新聞雑誌』の「兎 跳ねすぎて課税さる¹⁷」の見出しに始まり、次号の「課税で兎の御難¹⁸」では、店先に出していた兎が即時に1羽も残らずいなくなり、殺されたり、川に流されたり、床下に隠されたり、田舎で売り払われたりなどしている状況が示され、「其狼狽実ニ心地ヨキニ耐ヘズ」と冷やかな感想が掲載されている。12月14日付け『郵便報知新聞』には「愚民の上に苛政あり 兎のお灸御尤も」と題して「…愚賢の盲膏を蕩滌す。良工の手段固より庸流の興る所にあらず」と課税を容認し、「蓄ふ人は皆一金にさはぐなり 月に兎の飛んだ税金」という記事もある。12月16日の同紙には「猫と兎 珍妙問答」のタイトルで風刺問答が掲載された。猫は芸妓を意味し、芸妓と兎の問答である。

兎は一円の税を出し芸妓は三円の税を出す。芸妓に猫の異名あり、月を見て跳ね、猫花に依て転ぶ、品はかわれど同じ月花に浮かる獣仲間。兎猫に向て言うよう、今度御前方も税を出すとの風聞、お気の毒のことなり、併しさびれた女郎衆も三円取られて極盛んの地獄には税の沙汰もなし、ちと不公平なこと、思われる。猫言う、地獄は税所か、決してならぬとのことさ。兎言う、地獄を只やめろやめろと計にしては、是迄の兎と同じことにてやはり流行するのさ。此節我們を土蔵の中や板敷の下へ隠す者あれど踏込んで罰金を取ること、して見れば、何んは隠れた商売でも、上の御威光で裏店の隅々まで見通したら、知らぬことは有間敷に、隠し売女に税がなくて隠し兎に罰金あるは、ちと聞こえませぬニャア猫さん。猫言う、御前も此節焼餅にかぶれて彼是言うが、地獄も今に税の沙汰になるだろう。兎言、ナゼ。猫言う、皆様御存知の通り地獄の沙汰も金次第。

この背景には、同月10日、東京府による「貸座敷及び芸娼妓規則」の公布で、芸妓への月3円の課税が影響している。兎を土蔵や床下に隠す者があっても、踏み込んで罰金を取ること、隠し兎に罰金があるのに、隠し芸妓に罰金がないのは不公平だと兎は言う。隠れ芸妓も同様に課税対象となるだろう、なぜならば「地獄の沙汰も金次第」だからと落ちて終わる。

通達が出るやいなや大暴落が始まった。暮れも押し

迫った12月18日の『郵便報知新聞』には「大津絵もどき 兎のいましめ 一朝にして大下落」というタイトルで、兎飼育の無残な様子を伝えている。兎主が兎を10羽、20羽と束ねて旅立つ姿は哀れをさそい、「兎や兎」と声を上げて往来する人もあった。値段はコロ「子兎のこと」は2銭、孕み兎5銭という超安値となった。多くの兎を飼育していた者ほど大きな打撃を受けた。所有していれば多額の税金を払わなければならない、売っても大損となる。年末世相は混乱し没落する者が続出したのだった。

C 外国新聞に見る兎関連記事

外国の新聞にも豚や兎に関する報道があり、1871(明治4)年の『ノース・チャイナ・ヘラルド』に豚の輸入記事が見られる。

During the mania for pigs, which has now entirely subsided, several enterprising speculators went over to America to purchase stock. The proceeds of their visit are now arriving; the last steamer from San Francisco brought three hundred, and some eight hundred more are to follow in the ships "St. Josephs" and "Percy Edwards." It is to be hoped they were brought cheap and low freight accorded them. Already numbers are being sold by auction, designated as "imported specially for Japan."

(22 Mar. 1871, *The North-China Herald*)

豚の輸入は下火にはなったとは言え、流行時には相場師がアメリカに豚の買い付けに渡り、最近のサンフランシスコからの蒸気船には300頭が積まれ、さらに800頭が入荷の予定であると伝えている。そしてその多くが既に「日本向け特別輸入」として競りにかけられていると言う。

しかし1872年には、豚から扇型のしっぽをした羊に流行が移り、高値で売れたとある¹⁹。

そして明治6年にはいよいよ兎の記事が登場する。『兎狸月下問答』が出版された同時期の1873年5月17日付けの同紙によると、

... A rabbit auction had been held, but it is not said with what success. It is said that some man in the Mmemototcho is asking \$180 for a pair of rabbits, having refused \$140, and that three Chinamen have rushed off to Shanghai to buy bunnies; but if the present silly mania is to collapse as quickly as the recent sheep one at Kioto

did, the sooner the speculators return the better for them. At Kioto, sheep, after running up to 25 or 30 rios, fell even more suddenly than they rose, till they were to be brought for five rios each.

(17 May 1873, *The North-China Herald*)

とあり、ムメモチョー[ウメモチョウーのことか]の男が兎のツガイに180ドルの値をつけ、3人の中国人が兎の買い付けの為に上海へ急いだと記す。しかし京都での羊熱が一気に冷めたと同様に、このような馬鹿げた兎の異常人気もすぐ冷めてしまうだろう。京都では、25両から30両にまで高騰した羊が一気に5両まで下落したというから、兎熱もそうなるだろうと予測している。

同年8月の『タイムズ』の記事は兎投機を辛らつに批判したものである。

As an instance of the ridiculous craving for novelty, which illustrates the present transition period in Japan, I may mention the mania which has been developed for pigs, fowls, and rabbits. The most absurd prices have been paid for these creatures, [...] there has been a good supply the folly has run highest on rabbits, and the Japanese newspapers—another recent outcome of the new civilization—relate queer stories on the subject. A man killed his father the other day because the father refused \$150 (about 35 l.) for a rabbit which they possessed, but which unfortunately died before morning. Another man dressed up a cat in a rabbit skin, and sold her for 30 l. in the market, but the creature unfortunately mewed while the money was being counted, and a free fight ensued. These follies almost shake confidence, at times in the motive which has prompted such acquisitions as railways and telegraphs. Are these also adopted because they are new and foreign, or from a wise appreciation of their value?

(21 Aug. 1873, *The Times*)

目新しさを求めるあまりの馬鹿げた一例として、豚、家禽、兎への熱狂を指摘している。このような生き物にあきれるほどの大金を支払い、特に西洋の血統を求めている。兎については愚かさが絶頂に達した例として、前述の親子喧嘩で父親を殺した男や、兎の皮を着せて売ろうとした猫が、お金を数えているうちにニャーと泣いて、喧嘩沙汰になったという話を挙げている。こうした愚かな事例を見ると、鉄道や電信機の

ようなものを取り入れようとする動機への信頼が揺るいでしまうと伝える。はたしてこれらもまた新しく外国から来たものだから採用されたのか、それともそれらへの分別ある評価からなのかと疑問を呈している。前述の『新聞雑誌』の親子喧嘩に始まる殺人はセンセーショナルな事件だったと理解できよう。

次に7月の『ニューヨーク・タイムズ』の記事を挙げよう。

[...] The latest bubble that has burst here is the great rabbit mania, which has raged here for some months past, [...] A few days ago fancy rabbits brought here fabulous prices. Foreigners were engaged at high salaries to preside over establishments frequented solely by rabbit gamblers, the Japs being prohibited from ostensibly keeping such houses. At last the bubble burst on the arrival of the steamer from China with a cargo of the precious animals. Rabbits are now worth a bit apiece which commanded \$100 a week ago. As this folly but followed a pig delirium, it is new rage for Braham fowls. These are already signs of the approaching madness, and so fortunes are likely to be lost and won in this new species of gambling.

(‘Views of Japan’ Fresh Sketches by an American. Yokohama, June 4, 1873. in *The New York Times*, 7 July 1873)

ここでは兎投機の熱病をシャボン玉の泡に譬えている。2、3日前には珍種の兎が法外な値をつけた。表向き日本人の営業が許されていないため、兎の相場師が出入りする施設では外国人が高級で雇われている。中国から新たに珍しい動物が到着するなり、兎の価格は100ドルから二束三文に暴落した。次はブラハマ鶏の熱狂が始まろうとしている。おそらく新しい投機によって財産が失われたり大もうけしたりすることになるだろう、と予告している。この記事からは、1873年前半にも大きな価格暴落があったことが判明する。6月21日付け『ジャパン・ウィークリー・メール』も、兎投機が崩壊し、次の徴候として家禽への嗜好が表れていると伝え、危険な兎熱の終焉をオランダで見られたチューリップ投機に譬えている²⁰。

7月の『ノース・チャイナ・ヘラルド』は次のように伝えている。

It is astonishing to what an extent the rabbit

business is still carried on in Yedo. The part of Yedo known as Shimabara, close to Tskidji, is a collection of rabbit auction marts. These are all carried on by five or six Europeans, who earn from \$100 to \$250 a month by merely lending their name to some of these establishments. Each auction has its own flag, and persons passing through Shimabara will see combination of colours which he will not often meet with elsewhere. That the business is profitable one will be seen by the fact that as much as \$300 per month have been offered to Europeans, to be given them, if they could possibly open one of these rabbit-vending auctions outside of Shimabara or Tsukiji. -*Japan Herald*

(12 July 1873, *The North-China Herald*)

ここで確認できるのは、前出7月7日付け『ニューヨーク・タイムズ』上の記事と同様に、売買で外国人の関与が認められることである。かつては「兎会」と称する兎集会で、兎は高価で売買がされていた。東京府庁は「破産の本（もと）」だとして、1873年1月18日に集会禁止の通達を出していた。それへの抜け道として外国人が高給で雇われていたことが分かる。

兎の競り売り市場は島原や築地に集まり、5、6人の西洋人が複数の商店に名前を貸している。それだけで月に100ドルから250ドルもの収入を得ており、日本の兎ブームを口実に甘い汁を吸っていたのは少数の西洋人だった。

前述のように、12月7日に兎税通達により兎の値段の大暴落が始まった。12月20日付けの『ジャパン・ウィークリー・メール』はこの有様を次のように記している。

The following edict was published on Monday, and the consternation it has created is beyond description. The unlucky owner of fifty rabbits is said to have drowned himself and the animals near Asakusa because he was unable to pay the tax. Many have been sent into the country, and the price has fallen to one or two *tempos*. But the persons who ought to be taxed are the dealers, not the people who keep a few rabbits for their amusement. This is terribly arbitrary legislation, though we are not displeased to see a check put upon an expensive folly for which the farmers will, one of these days, pay dearly.

(20 Dec. 1873, *Japan Weekly Mail*)

兎税通達もたらした混乱は筆舌に尽しがたく、税金を払えない飼主は兎もろとも川に身を投じた。税金が課されるべきは売買業者であって、娯楽のために僅かな兎を飼っている人々ではないだろうと指摘し、布達は理不尽だと批判している。尤も、このような愚行への措置はまんざら不快ではないとも記し、投機熱に対する外国人の冷めた視線も伝わってくる。

5 おわりに

以上のように、「開化物」の作品中、『兎狸月下問答』はギャンブルで道を誤らないようにという教訓だった。「二兎を追うもの一兎をも得ず」だからと、堅実な生活を送るよう求めている。『兎の問答』では兎税のことが主題となり、詐欺まがいの投機熱に浮かれて大金を失った兎鷺正治が、「自業自得」だとけんもほろろに切り返された。作者小川為治は、西洋から移入された自由経済に対処できず、因循とされる仁政に期待する兎鷺を否定した。この冷たい対応には西洋の経済論理や自己責任論への警鐘も感じられる。また豆腐よりもオカラの値段が高くなったと言われるが、人間の食事よりも栄養バランスを意識している高価なペット・フードの現状とよく似ている。

外国の新聞もまた日本の兎ブームを冷ややかに客観的に報じた。外国から齎される様々な投機物件〔ここでは動物〕に踊らされ、熱狂する馬鹿げた姿にあきれている。また政府の目を盗むために、姦商と外国人が共謀していたという実態が理解された。兎税は兎売買を行っている姦商こそが払うべきだという指摘も重要である。兎飼育は娯楽であり贅沢であり、投機の対象ではあった。しかしお上の政策は、姦商と名前貸しの外国人には目をつぶり、兎所有者にのみ課せられ公平さを欠くものだった。兎税徴収の政策に従って翻弄されたのは、布告の前に売りぬいた一部の旧藩主や華族を除く、一般庶民だった。現在ではかたく禁じられているインサイダー取引だが、もちろん当時は問題にもならなかった。

高額な兎賦金布達の直後から兎の処分に困り、捨てられたり殺されたりした。「しめこなべ」にされ1杯10文で立ち売りする人も現れ²¹「受領は倒る所に土を掴め」のたくましい例もあった。

その後兎熱は沈静化、兎飼育が減少し、明治12年6月に兎税は廃止となった。そして8月には再び兎の値が高騰し、それと同時に取り締まりも強化された。いたちごっこが続く中で兎熱が次第に冷めて行くと、次

は犬、狐、植物では万年青や蘭などがブームとなった。

明治6年5月に来日したイギリス人、バジル・ホール・チェンバレン (Basill Hall Chamberlain, 1850-1935) はまさにその兎流行に直面している。彼は『日本事物誌』で「流行」(Fashionable Craze)と題して、数年毎に新しい流行が起こり、兎から鶏頭、運動競技熱、ワルツ、「ドイツ麻疹」と呼ばれるドイツ熱、心霊現象、こっくり占い板などを列挙している。そのような社会現象を客観的に冷静に批評するためには外国人の目が必要だったと思われる。外国新聞の記事をさらに詳細に吟味し考察することを今後の課題としたい。

(指導教員 金森 修教授)

注

- 1 興津要編『明治開化期文学集 (1)』筑摩書房、1966年。
- 2 『本草綱目』は明の李時珍 (りじちん) によって著され江戸時代に日本に伝わった。本草学者小野蘭山 (1729-1810) は江戸の塾「衆芳軒」で『本草綱目』を講じ、孫の小野職孝 (もとかか) はその講義録を『本草綱目啓蒙』として纏めた。平成23年9月17日から11月6日にかけて、練馬区立石神井公園ふるさと文化館で「江戸時代の百科事始—本草学者小野蘭山の世界」と題した展覧会が開催され、学芸員の小宮佐和子さんから蘭山資料の説明をいただいた。また日本英学史学会会員の吉田芳輝さんより、『本草綱目』『淵鑑類函』『格致鑑原』等での兎記述部分の資料提供を受けた。
- 3 これはイソップの寓話をもとにしている。原話は、川辺を歩いていた鷺が川面を見ながらご馳走を狙っており、見事なスズキを見つけたが、もっと立派な魚を待っている内に魚たちは移動し、結局小さなカタツムリで満足しなければならなかった鷺の話である。あまり選り好みをすると結局最悪何にもありつかないという教訓話である。
- 4 1873年5月1日から11月1日までウィーン (オーストリア・ハンガリー二重帝国だった頃の帝都) で開催されたウィーン万国博覧会のこと。日本政府が初めて公式に参加した博覧会であり、敷地内の日本庭園は好評だった。原著には発行年が記されていないが、博覧会が予定されているという記述があるので、1873年の4月前後に著述・発行されたと筆者は考える。
- 5 生没年等詳細は明らかではない。
- 6 『東京日日新聞』、明治10年2月26日。
- 7 原著『兎の問答』では12月5日となっているが、12月7日が正しい。
- 8 当時の1円は、明治6年の東京府における玄米一石当たりの時価は4円80銭であった。大人一人が1回の食事に一合食べて3ヶ月分の米の量だった。
- 9 川崎房五郎『明治東京史話—史実にみる四十五年の変遷—』108-109頁。桃源社、1968年。

- 10 『日要新聞』第31号, 明治5年6月。
- 11 『新聞雑誌』第54号, 明治5年7月。
- 12 『東京日日新聞』明治6年4月19日。
- 13 『新聞雑誌』第93号, 明治6年。
- 14 『日要新聞』第72号, 明治6年。
- 15 『新聞雑誌』第91号, 明治6年4月。
- 16 投機的取引をする商人のこと。
- 17 『新聞雑誌』第177号, 明治6年12月。
- 18 同上, 第178号, 明治6年12月。
- 19 『ノース・チャイナ・ヘラルド』1872年1月18日。
- 20 21 June 1873, *Japan Weekly Mail*
- 21 『新聞雑誌』第184号, 明治6年12月。

謝辞：文書解説に際し、法政大学名誉教授安岡昭男先生よりご助言をいただきました。お礼申し上げます。

参考文献

第一次資料

- ・ 瓜生政和『兎狸月下問答』1873（明治6）年，白山映子所蔵。
- ・ 小川為治『兎の問答』1873（明治6）年12月，国立国会図書館，近代デジタルライブラリー。
- ・ 『諸聞集』、『日要新聞』『東京日日新聞』『郵便報知新聞』等の新聞。
- ・ Chamberlain, B.H. *Things Japanese*, Yushodo, 2001. *Japan Weekly Mail*

第二次資料

- ・ 赤田光男『ウサギの日本文化史』世界思潮社，1997年。
- ・ 内川芳美・宮地正人監修『外国新聞に見る日本』毎日コミュニケーションズ，1989年。
- ・ 興津要編『明治開化期文学集（1）』筑摩書房，1966年。
- ・ 鍋木清方『隨筆集 明治の東京』岩波書店，1989年。
- ・ 川崎房五郎『明治東京史話—史実にみる四十五年の変遷—』桃源社，1968年。
- 『新版 文明開化東京—明治東京史話』光風社出版，1984年。
- ・ 国立資料館編『明治開化期の錦絵』東京大学出版会，1989年。
- ・ チェンバレン，B. H. 『日本事物誌 1』（高梨健吉訳）平凡社，1969年。
- ・ 中山泰昌編著『新聞集成明治編年史』復刻版，本邦書籍，1982年。
- ・ 鍋島高明『今昔お金恋しぐれ—文学にみるカネと相場99話』河出書房新社，2000年。
- 『相場師異聞—攫千金に賭けた男たち』河出書房新社，2002年。
- ・ 古川哲史・石田一良編集『日本思想史講座』第6巻，1976年，雄山閣。
- ・ 牧原憲夫『明治七年の大論争—建白書から見た近代国家と民衆』日本経済評論社，1990年。
- ・ 明治ニュース事典編纂委員会『明治ニュース事典 I』毎日コミュニケーションズ，1983年。
- ・ 吉野作造他『明治文化全集』第20巻，日本評論社，1929年。

図

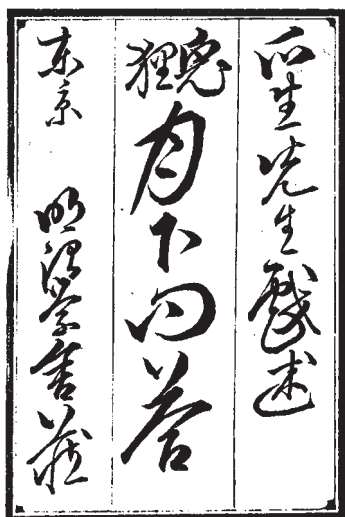


図1 『兎狸月下問答』表紙
(白山映子所蔵)



図2 『兎狸月下問答』「兎とたぬき月下にあそぶ」
(白山映子所蔵)



図3 『兎狸月下問答』「狸人をおどす」
(白山映子所蔵)



図4 『兎狸月下問答』「人うさぎをあきなふ」
(白山映子所蔵)



図5 『兎狸月下問答』「さぎ鮎をとる」
(白山映子所蔵)



図10 「因循開化 流行撃剣会」『錦絵幕末明治の歴史6』「文明開化」より転載



図6 『兎狸月下問答』「かちかち山の図」
(白山映子所蔵)



図7 『兎狸月下問答』「西洋婦人の図」
(白山映子所蔵)



図8 「開化因循興発鏡」(『錦絵幕末明治の歴史6』「文明開化」)より転載



図9 「本朝舶来戯道具くらべ」(『錦絵幕末明治の歴史6』「文明開化」)より転載